在宅医療という新しいカタチ

総合在宅医療クリニック代表 市橋 亮一さん

2009年4月1日、羽島郡岐南町に岐阜県で初めての『総合在宅医療クリニック』が誕生した。

代表は医師の市橋亮一さん（40）。若き青年医師(開設当時36)が「なぜ、この道を歩き始めたのか、どんなことをめざしているのか」聞いてみた。

市橋さんは1973年、岡崎市で生まれた。高校時代、ラグビーの試合中に鎖骨を骨折して整形外科で診察をしてもらった。夕方になって「鎖骨を固定するバンドが手に入った」と先生から電話が入り、家まで来てもらい手当を受けた。

その時「自宅にいる患者さんの所へ出掛けて行って支援をする、こんな仕事をやってみたい」と思った。年をとっても価値を持ち続けることのできる人でありたい。勝ち負けでなく、みんなが輝ける人になれる分野で働きたい。そう考えながらも、自分の仕事を見つけられないでいた自分に仕事のあり方を見せてくれた先生だった。

在宅医療への道

1998年、名古屋大学医学部を卒業後、名古屋市内の病院などでいろいろな科を経験し、総合内科で全部の科を見るようになった。市橋さんが卒業した時は、まだ在宅医療の仕組みは整っていなかったが、今から7年前、大学の後輩が名古屋で在宅医療を始めていたのを知ったという。

患者さんの自宅に入れてもらい、その人の人生を一緒に考えていける。病気を治すだけでなく、その人のやりたいことを実現するためのサポートができる。そのためには在宅医療が良いのではないかと考えた。

市橋さんは、大学時代アウトドアが好きで、岐阜の長良川によく遊びに来ていたという。開設すれば、24時間365日、患者さんの所へ行くため、家族に負担がかかる。持続可能なスタイルのためにも、妻の実家の近くで、自分自身もなじみのある岐阜での開設を目指した。

『総合在宅医療クリニック』がある岐南町は交通の要所。半径8キロ以内。30分の範囲がエリアになる。

開設して4年。現在のスタッフは常勤医師2名、非常勤3名、看護師6名、管理栄養士2名、音楽療法士1名、事務・バックオフィススタッフ5名。

在宅医療に必要な医療器具や物品を車に積み込み、定期的に患者宅を訪問する。

病院へ行くのではなく病院が自宅にやってくる仕組みで、診察や検査、薬の処方、予防的な指導などを行い、病状が悪くなったときは夜間・休日問わず対応する。

訪問した時に、診察レポートを患者さんに渡し、在宅カルテとする。このカルテを訪問看護師やケアマネジャーと共有して、一貫したケアができるようにする。病院に入院することになっても患者さんは、この在宅カルテを持参する。

大切な「いつもの生活」

花が大好きな七〇歳代の女性の話をしていただいた。女性は家に帰り、花作りや、孫と遊びたいと希望していた。病院の中では、がんの痛みが苦しくて痛み止めの薬が来ることだけが楽しみな人だった。ある日、家に帰ってみようということになった。本人は痛みがあるので不安だったが、薬の調整などをしたところ、痛みが和らぎ、好きな花も見ることができ、お孫さんとも過ごすことができた。病院では定期的に「痛みはどうですか?」と聞かれるが、家にいると病気以外の事を考えることが多くなり、痛みも忘れる。食事の味付けもいつもの味なので、食も進む。

チーム作り

現在は、在宅医療でも携帯電話で呼んでもらえば、ナースコールに近い時間で駆けつけることができる。1人暮らしの人でも可能である。家を病室だと思えば、そこに医師や看護師が出入りするということになる。

患者さんを中心にして、1人1人、映画を撮るように、必要な人をそろえていく。ケアマネジャー、看護師、管理栄養士、そしてリハビリ、デイサービス、ショートステイなどで、その人の希望に近づけるようにチームを組んでいく。

設立以来続けているのが、木曜日に行っている勉強会。医学、介護、社会の仕組み、組織運営などいろんな分野から講師を迎えている。時には患者さん自身や家族が参加することもある。様々な人がいて、様々な家庭がある。在宅医療は、そこを尊重しながら、安心して生活できるように、いろいろな方と連携・協力をしていくことが大切。自宅での療養を希望される患者さんのニーズに少しでも応えることができるように、日々スタッフと共に学びながら取り組んでいる。

最後に「これからの夢は?」と伺った。「今は夢の中、夢の途中だ」と明るい声が返ってきた。

（お問い合わせ）
TEL 058-213-7830
無料相談窓口　月～金　9時～17時

とっておきの話

やがて創建一三〇〇年を迎える美江寺観音

岐阜市民会館から道路をはさんで北側に朱塗りの仁王門や本堂など、立派な寺院建築が眼に入る。十一面観音像を本尊とする美江寺観音だ。この観音像は最初、三重県名張の寺に祀られていてその後、瑞穂市美江寺の地に移された。養老年間（七〇〇年代）の事である。江戸時代には中山道「美江寺の宿」がおかれた。また戦国時代、天文一〇年（一五四一年）頃、美濃国主斎藤道三によって美江寺の地から厚見（岐阜）の現在の地に移された。この移転について面白い話が残されている。本尊が川を渡る時、火の玉となって元の美江寺の方向へ戻っていったと伝えられている。これは「美江寺の宿」にあった本陣の有力者の子孫の話が出処となっている。

美江寺観音は戦前、東向きに建っていて今の蚕糸会館辺りに仁王門があったらしい。寺は戦災で全焼したため、今の建物は全て南向きに建てられている。当時の境内は広く、現在の二、三倍はあったと思われる。世の移り変わりと共に交通機関が発達し、道路が新設、拡張されて今の規模になってしまった。

明治、大正、昭和の時代になって岐阜をはじめ近郊の農家や隣の愛知県でも養蚕が盛んになって美江寺観音では「お蚕（かいこ）まつり」が行われるようになった。

▲明治中期の渡御（『風俗書報』73号、明治27年刊）

毎年三月の祭り当日になると、猩々（しょうじょう）車といって山車の屋根の上に猩々が乗った台車が境内中央に引き出される。猩々とは大秘法の霊験により示現した架空の翁の姿である。猩々は柄の長い桧杓（ひのきびしゃく）を肩にかついで立っている。この桧杓の底の抜け具合で、その年の養蚕の吉凶、農作物の吉区を占う。餅まきも境内に組まれた大きな櫓の上から大量に参拝者にふるまわれ、その後、猩々投げといって、猩々人形が同じく参拝者に向かって投げられる。その取り合いで子供たちが怖くて近くに寄りつけない。別名「けんかまつり」とも呼ばれて。

境内では、美江寺名物の土鈴というものがたくさん売られていた。これは素焼きの鈴にきれいに着色されたもので、大小さまざまな形のものがある。このような楽しい行事も時代の流れによって行われなくなってしまった。寂しい限りだと思う。

美江寺観音も遠く美江寺の地で創建されてから、来る二〇一九年には一三〇〇年の歴史の節目を迎える。